シンポジウム“宮城県の温泉について”

Symposium on the Hot Springs in Miyagi Prefecture

1. 宮城県の温泉の歴史について

東北学院大学　佐々木慶市

(昭和48年8月30日受理)

On the History of the Spas in Miyagi Prefecture

Keiichi SASAKI
Tohoku Gakuin University

宮城県の温泉は奥羽山脈の東斜面にあり，南から北に小原・鎌先・遠刈田・青根・秋保・作並・定義・川渡・鳴子・鬼首・温湯・駒ノ湯等がある．このうち．古代からとくに著名な鳴子温泉を中心として，宮城県の温泉の歴史を概説する．

鳴子温泉がはじめて史書にみえるのは，『続日本後紀』の承和4年(西暦 837) 4月16日の条で，次のように記されている．

「陸奥国言す．玉造塞の温泉石，神雷響き振い，昼夜やまず，温泉河に流れてその色漿の如し，加うるに以て山焼け，谷塞がり，石崩れ，木を折る．更に新沼を作る．沸声雷の如し，此の如き奇怪，あげて計うべからず．よって国司に仰して災異を鎮謝し，夷狄を教誘せしむ．」

すなわち，当時この地にすさまじい火山活動がおこって，温泉が沸騰し，また新沼すなわち現在の潟沼ができたことが知られる．

10 世紀の『延喜式』神名帳には，玉造郡鎮座の神社として，温泉神社 (鳴子)・温泉石神社(川渡)・荒雄河神社(鬼首)の三社があげられているが，いずれも温泉を神格化して神として祀り，これを畏敬したものである．

13 世紀の『八雲御抄』(順徳上皇撰) には陸奥の名湯として「名取湯」(秋保温泉)・「佐波古湯」(飯坂温泉)・「玉造湯」(川渡温泉) の三湯があげられており，この地の温泉が当時都にまで知られていたことが分る．

しかし古代・中世において温泉がどの程度人間に利用されたかについては明らかでない．思うに，温泉の効能は早くから経験によって知られていたろうから，温泉によって傷病を治療するための野外的な湯治は案外早くから行なわれていたのかも知れない．

温泉が一般人を対象として宿泊設備を有し，湯治に利用されるようになったのは，近世の藩政時代に入ってからである．この時代になると，温泉の開発が盛んになり，その数がにわかに増加してくる．近世仙台領の温泉は合計 17 箇所である．元文3年 (1738) 京都で出版された『一本堂薬選続編温泉』には仙台領温泉として，名取・玉造 (川渡)・鳴子・鎌崎・青根の5湯が記されているが，これらが全国的に知られていたのだろう．19 世紀はじめ江戸で出版され

た『諸国温泉功能鑑』には，東前頭5枚目に「仙台鳴子の湯諸病吉」とあり，また東前頭24枚目に「仙台川渡の湯諸病吉」，東前頭39枚目に「仙台釜崎の湯ひつ・ひせん」，西前頭34枚目に「仙台あきうの湯頭痛吉」とある．鳴子温泉が当時全国的に著名な温泉だったことが知られる．

藩政時代の温泉は一般に「出湯」とよばれ，明かに湯治を目的として利用された．これは天然の資源であるということで，私的所有を許されず，山林や鉱山などと同様に，藩の所有であり，金・銀・銅・鉄等と共に幕府の定めた金山方15品目の一つに数えられ，藩の金山方役人の管轄に属した．したがって藩から湯守が任命された．湯守はたいてい地続きの百姓で，通例木賃宿を兼ねた．湯守は出湯を管理し，入湯者から湯銭を徴収して，藩に運上あるいは役代とよばれる一定の請負料を納入した．これを納入すれば，残りの湯銭はすべて湯守の収入となるものだった．18世紀の藩政中期以降湯治人が増加するにつれて，湯守の収入が多くなり，そこで運上額をせりあげて湯守の地位を競願するものがあらわれた．例えば城下町の大商人とか，郡村の地主商人資本家である．こうして各温泉においては伝統的な湯守がその地位をおびやかされてきたわけであるが，かれらはよく頑張って多くは従来の地位を保全することができたようである．しかし青根湯のように一時，村の共同管理に移されたところもあった．川渡湯の場合は，出湯の管理をめぐって村と湯守藤島家との間に数年にわたって争いが続けられたが，最後に両者の妥協が成立し藤島家は村当局の提出した条件をすべてのむことにして，辛うじて湯守の地位を確保することができた．鳴子の滝の湯も志田郡の商人たちによって一時競願されたことがある．

出湯の運上額は各湯の盛衰を示す一つの指標である．これでみると，17世紀には鬼首の荒湯がもっとも盛んで，湯治人は年間延4,000人～5,000人といわれ，運上額は毎年40貫文でこれを藩に上納した．ここは天正14年(1586)の開湯で，17世紀はじめには仙台藩家中の療養所だったという．しかし荒雄岳のふもとにあって，しばしば洪水の被害をうけ，18世紀以降急速に衰えて，現在は廃湯になっている．

荒湯にかわって，18世紀以降繁栄したのは川渡湯である．その最盛期の寛政年代(18世紀末期)には，[川渡の義は御国(仙台領)一の名湯」(仙台藩郡奉行本郷伊右衛門申渡書)といわれ，年間湯治人数は，湯守吉郎右衛門の報告によれば，およそ2,000人とあるが，役人の見積りでは，7,000人～8,000人であり，いずれにせよ領内随一の繁昌ぶりだった．古くから「玉造の湯」として知られ，この地方ではもっとも早く開けた温泉である．脚気の名湯として知られた．

しかし19世紀に入ると，鳴子の滝湯が急速に発展してきた．ここも川渡温泉と共に古く，湯元にある温泉神社は前述のように延喜式内社である．伝説によれば，文治3年(1187)源義経が奥州に難を避けた時，その妻が出羽の亀割峠で亀若という男子を産み，この地に来て温泉で産湯を使い，この時はじめて子が産ぶ声をあげたので，ここを鳴子とよんだという．湯質は硫黄・明礬の混成で，梅毒や湿毒に著効があり，「かさ鳴子」ともよばれた．この地の旧家である遊佐一族が17世紀はじめ湯守となり，寛永13年(1636)大規模な家を建築して湯治人宿をはじめてから，しだいに湯治人が来るようになった．この宿が遊佐屋であり，18世紀はじめにさらに同村の三郎次・善十郎(共に大沼姓)も願の上あらたに湯守となり，それぞれ大沼屋(後の源蔵湯)，横屋を称した．享保10年(1725)滝ノ湯湯守の幸次郎・三郎次・善十郎の3名は運上として合計7貫250文を藩に上納している．そして19世紀以降は，川渡湯の運上

額が毎年金100切（金25両）なのに対して，滝ノ湯はその倍の200切（金50両）を上納したというから，その急速な発展ぶりが推察される．出湯の数も，はじめは滝ノ湯一つだけだったが，のちに河原湯（姥ノ湯），鵜淵湯（車湯），新車湯等が開発され，今日の鳴子温泉の発展をみるようになった．

次に湯治状況についてみよう．湯治人の大半は仙台領内の農民で，たいてい農閑期に来た．すなわち，3月中旬から4月末までと，7月末から9月までである．かれらは毎年続けて来るものが多く，中には9年連続して川渡湯に湯治に来たものがあったという．各湯には湯治の目的によってそれぞれの固定客があったようである．

農民のほかに，社会の各階層のものが湯治に来たことはいうまでもない．林子平や保田光則（幕末仙台藩の国学者）のような知名人も川渡湯に湯治に来ており，12代仙台藩主伊達斉邦は脚気湯治のため川渡湯に，14代伊達慶邦夫人は赤湯でしばらく湯治した．

19世紀の鳴子温泉は全国的に有名になっており，他領からも湯治に来るものが多くなった．例えば文政10年(1827)には水戸藩の小宮山昌秀という侍がここに湯治に来て，『浴陸奥温泉』を書いている．この書物には，当時の温泉場風景や宿泊設備，湯治状況等が詳細に記されており，藩政時代の温泉史研究のためには極めな貴重な資料である，

ところで湯治は7日間を一廻りといい，湯治期間の区切りとされた．たいてい二廻りか三廻りは滞在したようである．湯治人は全部自炊で，日用品や生活必需品は自家からの持込みや宿の内外で購入できる仕組みになっていた．また宿によっては将棋や碁のような娯楽設備をもつものもあった．浴場はどこでも男女混浴であるが，身分の高い人のためには特別な浴場が設けられた．

湯治人の増加するに伴なって，各温泉場には湯治人を対象とした土産品を販売する商工業者が多く発生したことも19世紀の温泉場にみられる顕著な現象である．とくにもっとも繁昌した鳴子温泉では，「温泉ヲモッテ生活ヲナスモノ百五十戸，漆器ヲ販スルモノ亦数戸アリ」(『大八洲遊記』）といわれた．文久元年（1861），川渡に湯治に来た保田光則は，5月5日鳴子に出かけて，町の風景を『撫子日記』に次のように記している．

「坂を下りてまた町をゆく．家数百余もあるべし．ひき物，まげ物，およそのうつわもの，ぬりえかきたるうる家々（註，漆器店）あり．ここに来りし人はみな，川渡赤湯などに来りし人びとも，ゆあみの家つと（註，みやげもの）をば，おうかたここに来てかひゆくめり．ここにてうるうつわ共は十か九，鬼首村にて造り出せるなり．」

すなわち，鳴子温泉には家数が百余軒あり，挽物・曲物・漆器等を売る店が並んでいた．そしてここに湯治に来た人はもちろん，川渡・赤湯に来た湯治人たちもみなここで温泉みやげを購入したという．現在有名になっている鳴子こけしも，この頃からみやげ物として製作販売されるようになったのである．

19世紀前半の文化文政時代は，江戸文化のらん熟期で，全国的に温泉場のもっとも繁昌した時期である．しかしこの後，天保の大飢饉以降は，農村の疲弊がはげしくなると共に，湯治人が来なくなり，各温泉場はしだいに不況におちいり，さらに明治戊辰戦争がはじまってからは一段と淋れるようになった．明治6年（1873）各温泉の報告書によると，いずれも湯治人が全盛期の半分以下に減少している．しかし明治20年代から近代社会の発展期を迎えるに及んで，各温泉場は再び活気をとりもどし，現在の隆盛をみるに至った．だがそれは湯治を唯一の目的とした過去の温泉場とは異質のものとなったことも認めなければならない．